

公民館講座紹介(大和村いいシマ学)

講座紹介シリーズの第4回は、11月22日(土)に開催された大和村いいシマ学の様子を紹介します。この講座は、月1回のペースで開催されており、講師は、高梨 修先生です。先生は、村の学芸員として中央公民館に勤務されております。

この日は、今年度1回目の巡検(あちこち巡って見てまわること)で戸円集落での開催でした。この日は、天候にも恵まれ12名の参加者がありました。集落に入る際に、先生から「他人の家の敷地に入らないこと」等の(注意事項の)説明があり、開始されました。集落内は、ムエザト(前里)、ミザト(美里)、サト(里)の3つに区分けされていることやシマの空間は、ノロ祭祀の聖地群(神山、神道、トネヤ、アシャゲ、ミャー(広場)、墓地、タチガミ等)が骨核となる構造があることについて説明を受け、参加者は、熱心にメモを取りながら聞き入っていました。

次回の大和村いいシマ学の開催は、12月13日(土)10:00~12:00まで防災センター学習室で予定しており、参加者全員でお話をするとのことです。今年一年をふりかえり、興味を持った事や、新年の抱負など情報交換をします。是非ご参加ください。



戦後80年奄美巡回展

令和7年(2025年)は、太平洋戦争が終結して80年となります。今日では、戦争を直接体験した方々が少なくなり、その継承が危ぶまれています。そこで、奄美大島5市町村で巡回展を行い、島内における戦争の被害の状況等を共有し、今一度、平和について考える機会として展示を行っております。

展示期間：11月21日(金)~12月21日(日)

展示場所：大和村防災センター 1F ロビー

本(ふん)の読(ゆ)む牛果てやねん?



豊年祭今昔(上)

今年度の豊年祭はどの集落も大変盛り上がったのではないのでしょうか。大和村での豊年祭は十五夜と九月九日に分かれて行われていますが、昔はどのようにしていたのかと思っていたところ、『大和村近現代史 大和村誌資料集I』に記載されているのをお知らせしたいと思います。当然、集落によって多少の違いはあると思います。

祭りの前日までに準備する神事(前)

①綱引き用の綱作り … 集落各戸より稲わらを一抱え程度を集会場に供出する。その稲わらで青壮年が直径4cm位の大きめの綱を作る。その綱をさらに3本合わせて直径10cm位の綱が完成する。その綱で祭り当日集落を二分して綱引きがされ、集落を清める。

②奉納相撲の土俵作り … 土俵に4本の柱を立てる。4本柱の椎ノ木の梢(こずえ)が合わさった所に神々が降りてくると信じられている。これらの柱を立てる順序はまず前日に屈強な青年十数名が深山(みやま)に入り、長さが2丈(約6m)余りの椎ノ木を4本切り出す。梢の5尺(約150cm)は枝や葉をつけたまま担いで土俵まで運んでくる。それから土俵の四隅に深さ約3尺(約90cm)位の穴を掘って立てて埋める。ただし、枝や葉が土などで汚れたら塩水で洗う。また、柱の傾斜は4本の梢が合わさるように傾けて立てる。柱を立て終わったら、土俵上に1丈(約3m)くらいの高さで4本柱にしめ縄を貼り、幣(ぬし)を立て下げる。そして最後に土俵の中央に砂を集め、円錐形に築いて頂上に塩盛を作る。

現在は稲作を行っていないのでワラがありません。綱引きを行うのは稲をメインにした祭りであるからではないでしょうか。非日常のことなので左ナイの縄だったのではないかと思います。私は綱引きをしていたという記憶がありません。また、いろんな資料を見てもどこの地域でもこのように綱を作り、当日に綱引きをしていたようです。

今はこの集落も立派な屋根付きの土俵で、4本の柱はその屋根を支える役目も担っています。昔はその4本の柱の梢が合わさるようにする。それはその合わさった所に神々が降りて来られるとの理由。このことから豊年祭が今年の豊作への感謝と来年の豊作を神々に祈願する行事であることが伺えます。だから、降りて来られた神々の見守る下で繰り広げられる相撲は神々に見せる「奉納相撲」となるのです。このように、昔の豊年祭の昼の部は綱引きと相撲がメインだったようです。この続きは次の機会に載せたいと思います。